芦高新聞
発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町55

芦高御指定
芦屋写真室
国鉄芦屋北出口前
電話芦屋四七三六

◇……時は水泡のように消え去った。今、3年生は新しき人生の門出に立った……◇

◇……巣立つ彼らの幸を在校生一同心から祈ろう。……◇

毅然たる貴兄に想ふて

今は古き灰色のノートに息吹のみ
つつましく大人しやかに美しく出でよ
雄なる天が下に、瑞木の蔭に若きを相語りて
今こそ淡き君の現れ出づる時なり
しかも、気に溶け込む君なら
想い出の乱舞に一人は笑み広ごりて興じ合う
我が心曳くもの何故に
想い出は我が宝なり
あなたは遠くに、雲まぐれかの雲の波、はや山の彼方
想ひ出よ、君といざ帰らまし
あれならん　憂ひをつなぐ　やんぬるかな
風の声　やんぬるかな
まさに我が心の草苗の如し
君を永遠に想はん
いざ、暗闇なる君が想ひ出
わが仮しき光の導びきに

論説

真善美

今日ここに三年生諸君は晴れの卒業式を迎えられた。そして今、ある人は進学という行為により、いわゆる〝社会〟へ一歩前進され、またある人は就職により直接〝社会〟へ踏み出された。

ところで今、われわれの大多数はクラブ活動に、〝受き問〟のための勉学に、若きエネルギーのほとんどを費しているが、実際われわれ高校生は、こんなことだけをしていればよいのだろうか。それでは人格形成をのがすわれわれにとって資料が余りに少な過ぎるのではないか。われわれは、もっと視界を拡張しなければならない。そして、人間が生存する限り、必ず存在する真偽、善悪、美醜の混合体のような〝社会〟を注視しなければならない。そして、その偽りない知識の泉から、真善美を引出せしめることはわれわれにとって、勉学と同じほどに重要視されねばならないことである。

〝社会〟の知識を豊富にすることにより、そして〝現実社会〟を理解することによって、われわれの人格を向上させるばかりか、われわれが実際に〝社会〟に踏み入る時に起きる不安も、ある程度減少させることができる。

これは〝都会型〟の〝疎隔された〟生徒の大きな欠点だ。原因は、われわれの閉心の対称が余りに多過ぎて、あれもこれもと思っているうちに、興味が薄れてしまうのかもしれない。

前の執行委員会は、できるだけ放課間等にかかわらないでおこうとしたらしいが、これも生徒の無関心さの一原因になったといえる。これでは余りに単調過ぎる。今度からは執行委員会の方から進んで前論会などを開き、生徒を引っぱって行くようにすることが大切だ。そしてまた、ただ単に芦高だけでなく他校の意見も求めるべきだ。

それでこそ、真善美を探求する真の学生の自治会機関といえるのだ。また、その学生の自治会機関こそ、われわれ学生の正常を歩んでいると言えるのである。

×　×

昨年は騒動法、勤評で世論は大いに動揺し、勤評闘争は今もなお闘断なく続けられている。

東京では、高校生が警職法反対のプラカードを掲げて市内を示行進し、またある地方では勤評で、知事を何時間もつるし上げた。そしてそれらの事実は、三面のトップに大きな活字となって、いやでもおうでも、われわれの目を向けさせた。にもかかわらず、芦高生の関心がこんなに薄かったとは、自分たちと同程度にある者までがまき込まれた闘争にも、彼らには何の興味もわかなかったらしい。もし起ったとしても〝めんどくさい〟で、すぐ弁当組みにする。

大空にはばたく五九名

明快・操守・敬愛

卒業生諸子に贈る

学校長　前川誠一

愈々御卒業おめでとう、心から御祝い申しますと同時に諸子の将来のお幸せと御発展を祈ります。さて諸子を送り出すに際して三つのことを申しておきたい。それは明快、操守、敬愛ということであります。

明快とは明快、明敏で知識が明らかで決断力があり意志が強いことである。意志が強くても盲進しては危険である。常に透徹した知性を養い、明朗闊達で、明敏果断、逆境に処して敗けない不屈の意志を涵養することである。

操守とは感武に屈せず、富貴に淫せず節操を守り通す気骨である。南洲翁の「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ」仕末に困る人間である。孟子の言う「可与以配二六尺之孤一。可与以託二百里之命。臨二大節一而不レ可レ奪也。」というとき人物こそ最も望ましいのである。しかして操守は文天祥の五気の歌に「時窮節乃見」のごとく進退谷窮境に臨んで見られるものであること。

敬愛とは、敬愛と価値を認めた時に起り、愛はその価値と一体となろうとする結合の態度である。換言すれば価値実現の意志的に決心の不断の連続と、それに伴う道に邁進してもらいたい。

以上三つを心に刻んでそれぞれの立場で積極的能動的に力強く生きぬいてほしい。

各賞受領者決定す

卒業生にとって名誉とされる恒例の〝賞〟受賞者は次のように決定された。

学力優等賞
河上亮彦、原　淳子、助野雅子
村上和功

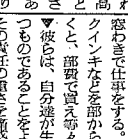
皆勤賞
浅田和夫、芦名洋子、井上幸ほか三十四名

自治会賞
副会長　佐野真章
〃　書記長　池本公一
〃　文化部長　足立栖子
〃　運動部長　吉岡順朗
〃　執行委員　大賀九州男
〃　〃　島尾一子
〃　〃　千速紘子
代議員会長　助野雅子
〃　若槻正博
〃　小川成彬
選挙管理委員長　浅井紀彦
代議員（二万年）　浅井紀彦
〃　阪本淳
〃　助野雅子
〃　吉田太千子
〃　書記外局　長谷川九郎
〃　西堀三千子ほか二十三名

送別会行なわる

在校生主催の二年生を送る送別会が去る二月二十四日（火）午後一時より講堂において第一部が行なわれ、引き続き運動場で第二部のサークルダンスが約一時間三十分にわたって行なわれ、三年生と最後のひとときを楽しく過した。

解説・メダル卒業記念



卒業生の皆様、おめでとうございます。在校生一同よりは心からのお祝に、記念メダルが贈られました。誠に美しい心のあらわれと思います。この記念メダルが贈られるようになりましたのは、さかのぼって昭和二十五年度の第三回卒業生からということになります。

今年まで、卯から亥と巡りめくって、兄弟にあがる動物をデザインの画材として描いてきました。いよいよ今年は兄弟のしんがり〝猪〟です。デザインも倍旧しての心構え……。それでは手持ちのメダルについてお話しましょう。

○例年より小さくする。○猪を描いたが、単純化、抽象化することに努力した。○円の下部に位置する形、すなわち弧BC、曲線BCによりできる〝二百月型〟は〝猪〟の全姿を表わす抽象型である。○その中の〝緑色で銃い感じを与える三角形〟は〝牙〟である。○胴体の部分に毛波を表わす短かい線が十一本、方向を異にしてあらわしてある。本数は第十一回卒業生にちなんだもの。○弧BC上に立つ二等辺三角形ABA（A＝A）円周角BACは直角である。○原型VBDECはA教室において、出席率八十％（ただし一組一人）のもとに行なわれた第三回後期代議員会は二月十二日午後二時四十五分から二十二号室を中心としてABを半径とする四分円である。さらに左右シンメトリーであり、安定の極を備えている。○Aを頂点とし、この円に外接する正三角形を作り、頂点A、D、Eに置なるように、校章〝芦の葉〟の三頂点を配置して描くと安定感を増す。○AB、ACは等しく、頂点A（理想を表わす）において結ばれている線は、学舎を保護する意味もある。○AB／（AC（＼）は十一を表わし、第十一回を意味する。○左右上方に小さく5、9と記されているのは一九五九年で二九が略されたもの。○全体の色調についてはいろいろ言われるだろう。レコードプレーヤを持ち込み、仕事をしながらも笑いの絶えないこの室は、われわれに全く親しく感じられる。

▼ところで、この室で珍現象が起った。なぜだか、みんなが音痴当入りよりも、大分ケチ臭くなった。例えば、委員会室の雰気は、なるだけ暗くなってからスウィッチを入れ、時それぞれ明るいは比較的明るくする。またマジックインキなどを部から持ち出して行くと、部費で買え等々。

▼彼らは、自分達が生徒の上に立つものであることをよく自覚し、その責任の重さを痛感するがゆえに、自然と責任感が行動となって現われてくるのである。だからわれわれは、彼らの行動をケチ臭いと考えてはならない。責任感の強い人達だとしなければならない。

▼これらのことは、筆者の目に映ったほんの一例にしか過ぎない。われわれの行動も、いつもこのようでなければならない。責任感のない行動は、信頼を失い、かつ自己の破滅せしめる。責任をもって行動することにより他人からの信用は厚くなり、かつ自己を発展せしめることになる。

裏表独語

お断り!!本紙に寄せた「時」は、藤原敬之君の作である。

行事予定

三月三日　大掃除
七・八・十・十一日　学年末考査
九日　代休
十四日　教養教理（1時登校）
十六・十七日　進学適性検査
十八・十九日　追試験
二十三日　終業式
三十一日　転入考査

席記者

◇二十一日の土曜日は執行委員会主催の座談会、図書部の映画会が催なり、図書部執行委員会とも「図書館へどうぞ」と、お客様（？）の争いに協力。

◇結局軍配は図書部に上ったようであった。前後二回の上演に観賞者二百人余。

◇先日行なったアンケートの結果、それにひきかえ座談会の開散なこと。十四・五人がもたるを思わない問題ではない。

難問に目をつぶるな

◇われわれの前に横たわっている諸々の難問は目をつぶることは許されない。現在の高校生活のあり方を今一度真剣に捉え合うせっかくの機会であったのを。（N）

職員人事

転任
片岡広先生（英語科）
昭和三十一年四月一日、本校に赴任され、去る一月十六日県立尼崎高校臨元分校へ転任された。
武藤章也先生（職業科）
昭和三十一年五月二十日、本校に赴任され、去る一月一日、県立川西高校六瀬分校へ転任された。

文化部　大賀九州男ほか四十九名
運動部　中嶋英彦ほか八十名

八十号を迎えての座談会
芦高新聞を語る

芦高生とともに12年――終戦後の混乱期に「読書クラブ」の有志によって壁新聞「校友新聞」が力強くうぶ声をあげてから早や12年――それがガリ版にやがて昭和22年には活版第1号にと成長した。翌年の新学区制実施によって名も改めに「芦高新聞」となり現在80号を迎えるに至った。

その間70号は毎日新聞・毎日小中学生新聞主催第7回全日本学生新聞コンクールにおいて全国区佳作に、第76号は神戸新聞社主催第10回兵庫県学校新聞コンクールで5位にそれぞれ入賞した記録もある。

このような発展は一朝一夕になったものではなく幾多の先輩の尊い努力と苦労の賜物である。

そこで出版部では80号を記念にこれまで新聞発行の任務にたずさわってこられた先輩諸氏や元・現顧問の先生方に集まっていただき現部員をまじえて、今までの芦高新聞をふり返り、また現在の新聞を批判するとともにこれからのとるべき道などについて話し合った。

歴代部員に集まってもらうつもりであったが、居住地や仕事の関係上ほんの一部に片寄ったのは残念であった。

出席者　衣笠周可（6回生）　佐藤昌志（6回生）　堀江利典（8回生）　海老千賀子（10回生）　笈方貞子（10回生）井上良信先生（元顧問）　奎谷舜造先生（元顧問）　安田直次先生（現顧問）　出版部員

うけるトピック

部員A　芦高新聞も当初のものと比較してすいぶん変わってきました。書き方は最近のものを笈方　至極しっかりしたものになっていると思いますので、それについてのご批判などおありせず言ってください。

佐藤　僕達のころは取材に苦労していないから、前と変わったように感じません。何か自分達でまだやっているようで――。

部員A　奎谷先生、井上先生、創刊当時からずっと芦高新聞を見守ってこられてお感じになったことを。

井上先生　現在の新聞はすべての点で洗練されてよくなっているようだね。

奎谷先生　私も同感だ。他校の新聞と比べるとき、芦高新聞は決してひけをとらないと思うが、昔に比べるとなんとなくトピックのうすい感じがする。

部員B　ですが、現在一〇〇枚以上と新聞の交換をしていますが、中には割り付けなど函館新聞をとりのけの大胆な新聞がありますよ。他校新聞からも大いに学ぶところがあります。

部員A　皆さん新聞をやっておられていろいろ思い出があると思いますが。

堀江　奎谷さんが風刺的な文がうまかったね。

井上先生　トピックのような堅い記事がどうしても一番に読まれるね。

佐藤　おもしろくて腹かけのを読みたがるのが読者心理というものだね。

部員B　おもしろい中にもヒリッとくるようなのが望ましい。トピックを書くにはセンスが必要ですが、現在はそこまで手が届かない状態です。

社会勉強になる新聞作成

部員C　話は変わりますがいつも出版部は部員が少なかったようで、そのために二人の人に多くの負担がかかり、それが非常な重荷となるようではいけないと思うんです。私達はできて言って社会勉強をしながら新聞を作りたいと願っていたんですが――。

堀江　僕がやったときは部員が少なかったのでいつも走りまわっていたが、それが特に重荷になるようなことはなかった。余り忙しそうに廊下なんか走ってばかりいたので新入部員に笑われたことがあった。（笑声）

佐藤　だが個人編集の割には主観的なものがなかった。

海老　私達のころから少し部員がふえたので、一人の人ばかりに責任を負わせるようにしました。みんなが新聞を作るという意味で。

堀江　部員が少数のため仕方のないことだが、三年の終りに「声笛」編集のため二日間で三時間しか寝ずに大へん疲れたことを覚えている。（笑声）

井上先生　一人もちの学年だってあったからな。君たち過去現在と新聞の仕事をしているわけだが、やっていようですから私生活への影響などは。

部員D　なんといっても一番時間的に制約を受けますね。学校や印刷所などで止むを得ない場合があるのですが、夜遅くなるのは特に女子の場合親が心配するのは勿論のこと、やはり新聞をやっていると直接いろいろなことが体験でき、また深く考えさせられますね。

佐藤　勉強もやかましくいわれますが、結局自分が積極的にならねばだめです。僕自身、自分を生かすべきか、殺すべきかについてはずいぶん悩まされましたが。各人が責任を持って仕事を担当することは大切ですね。

堀江　自分はやればこれまでできるんだという自信がついて、それは疑験勉強にも役立つと思います。

衣笠　目先のことにとらわれていると何もできないことになりますね。僕は今も大学で新聞の仕事をやっていますが、苦しいこともももちろんいろいろありますが、それらも楽しいうちで、苦しいことがなくなると気の抜けた感じがします。

奎谷先生　そういう部員ばかりだとたのもしいですな。

大切な企画の検討

部員C　近ごろの芦高新聞は内容に乏しく新鮮味がなくなってきているように思うのですが。

部員D　ええ、生徒からも「割り付けがいつも同じである」「発行の回数が少ない」とか、いろいろ苦情があります。前に「現在の芦高新聞は"新聞"としての役目を果していない。単なる記録にすぎないではないか」というような投書があったことですが。

部員A　年六回の発行だから、そういう声があるのも当然だと思いますが、少しくらい古くなっても重要なことは一応記録として残しておく必要があります。学校新聞においては記録ということも一つの重要な任務となっています。

奎谷先生　学校新聞である以上行事に制約されるのは仕方ないと思うが、扱い方によって興味のうすい感じにできるんじゃないですか。趣向を変えるとか、特別なことによって新鮮味ということは出てくると思うね。

堀江　割り付けなどにも一定のわくというようなものがあるね。

部員C　そうですね。特にタブロイド版（現在の芦高新聞の大きさ）では紙面が小さいので動きがとれず型にはまったようになりがちです。大版にするにしても、発行回数をふやすにしてもすぐ予算の問題からできなかなかむずかしい。

衣笠　問題を見つけだすことが大切だ。ありふれたのをもう一度検討しなおすことも大事ですね。

堀江　僕らのときは企画はかなか引き受けてくれなかった。

衣笠　まだないんですか。出版部には絶対部員は必要だ。八十号記念に一つ学校から寄贈されてもいいですね。

高校新聞のあり方
社会問題の取り扱い

部員D　ところで一般社会問題の取り扱いですが、高校新聞ではそれをどの程度まで載せればよいのか限界がわからないんですが。

部員C　現在では余り時事問題は取り扱っていません。問題がよほど大きくなるとかいむずかしくなければ勉強しないと、いい加減な常識程度の記事では書けませんから。

井上先生　しかし社会的なことを入れるのは問題ですね。記事の配置や大きさなど考慮しなければ。

奎谷先生　扱い方ですね。解説としてならやった方がよいでしょう。二面なんかこういうことにどんどん使ってほしいですね。

衣笠　最近は高校生も政治意識が高まってきたから、それを高校生なりに討論して掘り下げる必要はあると思う。

佐藤　高校生としての考え方、主張をその立場として掘り下げる様みがほしいですね。

衣笠　勤評問題なんか先生と生徒で討議すれば記事になるものもできるでしょう。

教壇随想

『19の告白』

英語科　山口九一

英語はオールラウンドな学問だから直訳だけでは何が物言いたいのか分からない場合が多い。授業をしていてもこれを東の間の線香花火に終ってしまった。諸君たちの中の幾らかのものと同様、真空地帯にいることばかりで、知らんことでも、もっともしゃべれないのが悔しいような気持で毎日を送っている。機械的な入試問題の要点などは年数と共に有難い救いである。

君と同じく、これに悩殺されなければ幸いである。あげくの果てに身体までこわして、遂に高校教師になりたいと思ったのだ。君のわからんことはあるぞ」『英語はなぜ勉強するんですか』（真面目くさったアホの質問）「先生、その英作文に誤もありますが」（全く泣きたい気持）「君と同じく、これに悩殺されなければ幸いである。あげくの果てに身体までこわして、遂に高校教師になりたいと思ったのだ。君のわからんことはあるぞ」『英語はなぜ勉強するんですか』（真面目くさったアホの質問）「先生、その英作文に誤もありますが」（全く泣きたい気持）「自信ありますが」（全く泣きたい気持）「自信ありますが」（全く泣きたい気持）「自信

弱点は表現形式に

国語学力標準考査から

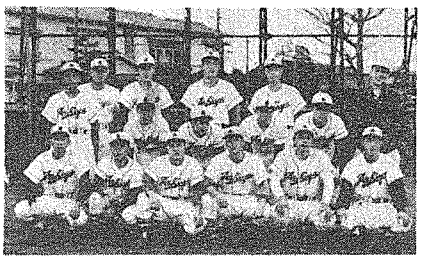
昨年の暮一・二・三全学年を通して同一問題による〝国語観覚学力考査〟が行なわれたが、その際の問題にしてもどちらも基本的な学力を必要とする問題であった。芦高のいことが数学となってあらわれている。

以上まとめとして国語科の金坂先生にお話を聞いてみた。

国語の指導方法を反省する必要を強く感じさせられました。案外基礎ができていないようです。大学受験を志す者にとっても、また就職を希望する者にしても、もっとがんばってもらいたい。古文、書き取りはドリルによって力のつくもので、特に書き取りは就職の場合、比重が大きいのでその点に弱い人は心して力をつけてほしい。古文では二度の調を知らない人の多いのに驚きました。ほとんどできていません。二年生以上はこれくらい知っていてほしいものです。「枕詞」はよくできていました。「係結」ではできていない問とできていない問とがありやはり覚えるからには徹底してほしいと思います。

選抜力を競う甲子園!!

一月二十六日毎日新聞大阪本社本校も県立尼崎高校と共に光栄社において第三十一回選抜高校野球大会の出場校が決定された。本校も県立尼崎高校と共に光栄ある兵庫県代表として甲子園に出場できることとなった。昨年県大会、近畿大会と奮戦してきたにぴき校と六度目の出場で、芦高ナインに同校全校生の喜びと期待につつまれている。偶然のことであろうが、昭和三十一年選抜大会でも県尼と共に出場し堂々勝決勝まで進んだ芦高である。四月一日から甲子園球場でくりひろげられる大会もその活躍ぶりは期待してよいものであろう。



今度は昨年より一段生長した大型チームとしてふさわしい成績を収めてくれるであろう。広瀬主将以下十三名の健闘を心から祈りたいものである。

【写真右から後列・石田先生、西岡、安藤、穂積、林、岡野、中列・高橋、藤井、天野、尾崎、前列・津田、広瀬、松永、吉宗、角森、丹羽】

異例の暖冬マラソン

一・二年力走す

恒例の全校マラソン大会は二月十四日（土）に予定されていたが雨天のため十八日（水）に行なわれた。午前十一時十分男女一斉に校庭南門をスタートした。数日来の雨もきれいにあがり異例の暖冬であったが、男女各一名の落伍者を出したほかは一・二年参加者全員完走した。

今年は特に警察より阪神国道は交通量が多く危険であるから使用しないようにとの注意があり、コースは次の通り。

男子　テニスコート―海岸線―旧国道―ガスタンク手前より南に下る―海岸線を一元（戻る。（全長約八・五キロメートル）

女子　旧国道を宮川一バス道を精中直例―海岸に向かう一直線を芦屋川バス道へ―旧国道―北西の門（全長約四キロメートル）

各学年十位入賞者

一年			
男子一位	E組	浜崎	28分35秒
二位	G組	国光	33分30秒
三位	H組	角森	33分39秒
四位	J組	永吉	33分53秒
五位	H組	行天	33分55秒
六位	J組	木原	34分01秒
七位	I組	横山	34分04秒
八位	G組	宮田	34分05秒
九位	C組	永井	34分20秒
十位	H組	藤林	34分30秒
女子一位	G組	池田	21分10秒
二位	D組	赤田	21分15秒
三位	A組	宮本	21分35秒
四位	H組	奈良原	21分39秒
五位	A組	小坂	21分40秒
六位	E組	磯林	21分50秒
七位	E組	新	21分50秒
八位	B組	伊沢	22分15秒
九位	J組	横山	22分23秒
十位	H組	森	22分37秒
二年			
男子一位	B組	高浜	32分31秒
二位	A組	津田	33分23秒
三位	C組	小椋	33分03秒
四位	E組	山田	33分09秒
女子一位	D組	小林	33分25秒
二位	C組	山崎	33分30秒
三位	D組	岡本	33分40秒
四位	E組	天野	34分10秒
五位	H組	仁藤	34分14秒
六位	I組	尾崎	34分35秒
七位	F組	須田	34分34秒
八位	B組	中村	21分41秒
九位	B組	草部	22分03秒
十位	H組	山口	22分03秒
二位	H組	福井	22分17秒
三位	D組	七条	22分25秒
四位	A組	岡田	22分39秒
五位	J組	阪野	22分50秒
六位	B組	後藤	22分55秒
七位	H組	藤原	23分13秒

望みたい

一〇〇%就職

本年度の就職戦線もようやく下火に近づき、本校も後残すところ十三名（男子十名、女子三名）となった。この十三名も近日中には決定の予定である。昨年度よりはやや良い成績をあげているものの一〇〇%就職を望みたいものだ。

ラグビー

▼全国大会兵庫県予選（11・3）

芦　屋　0（0―112）23兵　庫
（0―0）

▼近畿大会兵庫県予選
一回戦（2・15）

芦　屋　38（2414―0）0星　陵

サッカー

▼西宮リーグ戦

芦屋2―0県西（1・17）
芦屋2―0甲陽（1・19）
芦屋2―1関学（1・20）
芦屋2―0報徳（1・22）

バスケット

▼阪神大会（1・26王子体育館）

男子
芦屋83―39関学

谷口君特選になる

県下小、中、高校絵画展

阪神美育作家協会、朝日新聞神戸支局共催の第三十一回県下小、中、高校絵画展は、一月十四日から日間神戸朝日会館三階ホールおよび大丸で開かれた。各学校三名の出品で、各学年ごとに特選、入選が決められた。本校入賞者は次の通り。

女子
芦屋24―20武川
芦屋15―29市西
芦屋24―47市尼

県大会への出場権獲得

▼阪神地区新人戦一回戦

柔道

三位入賞　横山陳男

特別賞に藤田君

2年　第三回競書展

岡崎市中央書道協会の主催で二月三、四、五日の三日間三河会館で第三回競書展が開催された。本校書道部からも多数参加し十名が入賞した。

▽特別賞　藤田功　▽金賞　寺島智子　▽銀賞　北田育弘　藤田功　▽銅賞　浅野緑　▽入選　亀山史子　藤原妙子　加賀桂一　佐藤寛子　園枝豊　秋山作代　寺島智子　河原学　川井佐紀子　発紫子

第一回書初展

阪神書道会主催の第一回書初展は一月二十五日行なわれ本校から十三名が入選した。

▽銀賞　北田育弘　藤田功　▽銅賞　浅野緑　▽入選　亀山史子　藤原妙子　加賀桂一　佐藤寛子　園枝豊　秋山作代　寺島智子　河原学　川井佐紀子　発紫子

書写能力検定試験

神奈川県に次いで全国で二番目の書写能力検定試験が二月十五日（日）西宮市立西宮高等学校で行なわれた。本校からは書道部員も含めて一年十九名、二年十五名、三年二名、以上三十六名が受験した。結果は三月中にわかる予定である。

他校訪問⑧

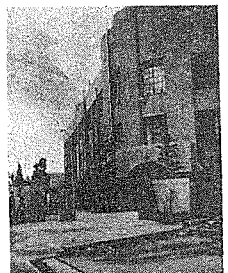
県立尼崎高校の巻

バイ煙に悩む

悪条件にも屈せぬ運動部

今回は日本の大工都として発展を続けている尼崎の県立尼崎高校を訪問した。周囲一帯煙突が乱立し、屋上からながめると尼崎のたくましい生産意欲の旺盛が感じられた。しかし工場地のまったただ中にあるこの学校は絶えずバイ煙、騒音、水はけの悪さに悩まされている。

最初に校内を案内してもらったが何だか薄汚れた感じがしたバイ煙のせいだろう。ただし食堂は例外。生徒全員が入れるぐらい広いもので生徒会への関心の深さがうかがえる。評議会も出席が少なく流会ばかりだとか。



【県尼正門附近】

窓ガラスは一枚もわれていてきれいに新しくできれいた。

クラブ活動は相当盛んらしくクラブ室にはいるとペンキの匂いがぷんぷんする。屋上のバレー、バスケットコートでは多くの部員がボールを追いかけている。

大会、近畿大会には例年すばらしい成績をあげている。柔道は国体出場、来年こそは総徳を破って県下の覇権を得ようと意気込んでいる。

その反面生徒会の方は投票選挙は立候補者皆無といった状態で生徒会への関心の薄さがうかがえる。評議会も出席が少なく流会ばかりだとか。

卒業後の進路については中ハカとではいてくる先生、月給日には教をうたう先生…など最後に、この学校は運動場が非常に狭いということを記しておく必要がある。本校の三分の二くらいのグランドで野球、サッカー、ラグビー、ハンドボール、テニスなどの球が入り乱れ、雨が降れば一面プールと化すありさまこのような悪条件にも屈せず黙々と練習にはげみ技をみがく彼らの闘志には感嘆させられた。

ここに尼崎人のたくましい生活の山をほじくっていた。彼らはクズ鉄を拾っていたのである。時々老婆がどこからともなくあらわれて来ていたが、こんなチンピラまで……。

あるおせっかいな生徒が二人、〝職務質問〟と称して出かけて行った。彼らとの一問一答「何やってるんだい」「鉄拾ってんねん」、「何にするの？」「金にかえるんや」、「いくらに売れる？」「百円ぐらい」。

ああ！何と微かわしい事実ではないか。自分で自主的に（？）やっているのか誰かに物めらたのかアバッチのまねだが何だか知らないが。

遊び盛りのこの子らが、なぜに遊ぶ時間をさいてまでクズ鉄拾いに熱中するのか。何が彼らをそうさせるのか。

近頃の子供は非常に打算的になっているといわれるならば、彼らがその典型的な子供であろうか。クズ鉄の魅力、いや金の魅力は彼らから意心をもうばい去る（N）

乱反射

クズ鉄の魅力

二月初めのある昼休時、三二五号教室の南窓寄りの生徒はハシをくわえたまま一斉にゴミ焼き場をながめていた。さていったい何に見入っていたのだろう。

ゴミ焼き場では小学二・三年の男児が三名、何やらしきりにゴミの山をほじくっていた。彼らはクズ鉄を拾っていたのである。時々老婆がどこからともなくあらわれて来ていたが、こんなチンピラまで……。

あるおせっかいな生徒が二人、〝職務質問〟と称して出かけて行った。彼らとの一問一答「何やってるんだい」「鉄拾ってんねん」、「何にするの？」「金にかえるんや」、「いくらに売れる？」「百円ぐらい」。

ああ！何と微かわしい事実ではないか。自分で自主的に（？）やっているのか誰かに物めらたのかアバッチのまねだが何だか知らないが。

遊び盛りのこの子らが、なぜに遊ぶ時間をさいてまでクズ鉄拾いに熱中するのか。何が彼らをそうさせるのか。

近頃の子供は非常に打算的になっているといわれるならば、彼らがその典型的な子供であろうか。クズ鉄の魅力、いや金の魅力は彼らから意心をもうばい去る（N）

タカシマ
編物教室
手芸
たこ糸、ビニール材無料講習
致します
三八通り商店街
電話芦屋5116

無数の窓を開く

三年F組　大平梨花子

私がいるへやには、周囲に窓がいっぱいある。大きい窓もあるし小さい窓もある。この小さい窓を次から次へと試してきた。高校時代にきるかぎりのものを破取った。しかし三年間は短かった。まだまだ知らなければならないことがいっぱい残っているうえに、自分が開けてきた窓ものぞくのがやっとの部屋はとても小さな窓が多いのである。私は余りにも多くのものを求めようとして小さな窓ばかり開けるのを閉めるのを私はためなことをしたり考えたりしてきただけなのかもしれない。「浅く、広く」といって、ただうわべだけを見て、それでわかったつもりになっているものがどんなに浜山あることだろう。視野を広く持っているつもりでも、ずい分ちがった方向からものごとを見ているのだろう。

時々、そのような自分に気がついてこれではいけないと思っても、もともと何でも知りたがり屋の私はものごとを深めようとはせず広く広くと求めてきた。いろんな人のいろんな話を聞き、そのたびに「なるほど」と思い、こんなものの見方もあるのだなと感じる。だから私はよく勘違いした。ある一つのことに対しても自分の確固たる意見を持つことができない。自分ではじっくり考え結論を出したとしても、先生や友達の話を聞くとまた考えなおすことになる。同じことを何度もくりかえして考えてきた。その時に応じていかげんに自分をごまかして考えていると、また振初の出発点から考えおさなければならなかった。考え、勘違し、また考えるということをくりかえしてきたのである。

めまぐるしく流れる時勢に対しても、私はそのような生とをくりかえしていた。高校生活でもっとも印象が強かった社会問題は、やはり勧評問題であった。この問題は、社会に対して一応の知識を持っていると自負していた私に、決してそんな生やさしいものではなく社会運動のあり方についても多くの意見を呼んだ時だけによい強いことを私に教えてくれた。大抵の時事問題などラジオと新聞雑誌で知る程度で、もっぱらマス・コミのお世話になるだけですますのであった。（マス・コミには何か平和を願う人なら一歩でも参加しよう」というスローガンにひかれてそんなに深く考えないで行進にいなければならない。社会に直結しる仕事をしたいと思っていた私の気持がいままに行動にでたことをとがめなかった。教室で先生から直接に話を聞く機会も得られた。私はいろんな意見に動揺しながら、そうとで何かの満足を得ようとしていたのではなかろうか。それとも協調していくことの貴重さと楽しさを教えてくれたクラブ活動も私の進の途中で会った友の不審な顔をひくものであった。このような問題に対して、私は一つの自分の気にしていたのだろうか。それらの問題は、社会全体を見る私の態度につ意見を作り出すために考えるとのどれもに私のほんとうの気持がもに社会全体を見る私の態度につ

大分前に、原水爆禁止のための平和行進があった。その時私は「行進して歩きながら何かおかしいと考えた。自分の気持が整理されていないまま行動にでたことをとがめなかった。教室で先生から直接に話を聞く機会も得られた。私はいろんな意見に動揺しながら、そうとで何かの満足を得ようとしていたのではなかろうか。それとも協調していくことの貴重さと楽しさを教えてくれたクラブ活動も私の進の途中で会った友の不審な顔をひくものであった。このような問題に対して、私は一つの自分の気にしていたのだろうか。それらの問題は、社会全体を見る私の態度につ

結論は出せなくても、私は考える過程で多くのことを学んだ。とにかく「社会に対して目をつぶるな」ということである。大きな怪物のような社会にいつも目を開けてなければならない。社会にいる一人として、社会に直結した仕事をしたいと思っていた私の気持がはこのようにいろんなことを知り何事にも振り動かされる「個の時代」であり、社会的には「受験地獄激烈な時代」である。高校は個人的には僕に自由な雰囲気を与え、育くんでくれた所であり、社会的には天下の高校であり、高校という立地的に最適な学校であるのだ。すべての問題にむかうことも忘れてはならない。また話し合う事ができる友達がいるのだ。

「人間性と科学」の解決へ

三年J組　中崎英彦

この問題は論「三年間」というさてこのような時代と環境に育った僕はどんなものを収穫し、どんな青春の可能性を失なったであろうか？それは分らない。僕が余りに若過ぎるからである。自分の心をそれ程までに分析し得る能力を持たぬ年だからである。

だがいま、心に刻みつけられていること、これが収穫かもしれない。自己と世界との関係の認識が開始めた。それまでは夢中で我武者羅で自分の好きなことを勝手にすると共に一面空虚で劣等感に悩まされていたけれど、自分の知恵と自分の意志によって自分を鍛錬しようとする一人前の人間になろうと自覚したのである。この時ドストエフスキーと漱石に巡り会った。この二人は今後も、おそらくみている。「人間性と科学」このジメンションの異った領域を如何にして統一するか？アインシュタインがあの偉大なエネルギーのジメンションを統一し、深遠なる$E=mc^2$の式を完成したように。このほんの疑問の解決を収穫とするために、この芦高生活三年間の収穫を如何に役立ち得るか…。

和の精神を学びとる

三年C組　石原陽子

人生の一過程において、高校時代という一時期を終えようとしている現在、私の心中は過去に対する思いと未来に対する思いとであふれています。芦高という自由な校風の下で過した三年間―それは数々の思い出に包まれた極めて有意義な毎日でありました。遊みきった青空の下、希望と期待に胸よくらませてこの学舎に入学して以来、いつも一つの大きな世界―高等学校という若々しい若人の構成する一環境の中に成長してきた自分であります。クラスにおける毎日、クラブ活動における日々の生活は家庭での自分とはまた違った楽しい雰囲気の世界だったのです。その各々の世界における自己の存在

ている反面なのです。今はすっかり慣れてしまった自分自身に対し、入学当時の希望と理想が果して達成できたかどうか問いかけてみる時、すべてが後悔の一語でつきてしまうような感に襲われます。しかし後悔といえば毎日が後悔の連続です。後悔の上に立っての自己反省、それが雑々の相に複われた複雑な時代の流れの中に、自己とされた自分の姿勢がこの二つの原因は、真の集まりに察察とした雰囲気の見られなかった一つの原因は、真いうものの推し進めてゆくべきものです。また、いつも胸に浮んだ自由精神の意味を知らないが故に、全体の中の個人としての責任と秩序が保たれなかったからであります。個人の生活に欠けてはならないものの一つ、規律あっての生活というものが、のびのびとした自由な芦高生活の中に欠けないようにして、社会事業という大きな組織の中で個性に自覚め、成長した。「個人と社会の関係」「動機と結果の問題」……数々の問題を投げ捨て一人校は熟に悩みたり、怒りて書物を投げたことを考えさせられた。

記念祭体育祭千五百人の行進を壇上で見つめる僕の心にはさまざまの感慨が湧き、頭がグラグラする程であった。原智恵子のピアノで「アパッショナータ」にのアパッショナータを振り動かした。権祖氏の講演では未知の世界にいと興味を覚えた。終祭祭ではファイアーを囲んで感激の涙を零くもおさえた。これらは総て卒業の苦しみの代償なのであった。「芦高生活の発展」・これほどの時を機会としていつまでも僕の心に残っていくだろう。

今ほど三年間を夢みている。苦しかったことも楽しかったことも総て。人間はあくまで夢見ることをやめぬらしい。僕は未来も夢みている。「人間性と科学」このジメンションの異った領域を如何にして統一するか？アインシュタインがあの偉大なエネルギーのジメンションを統一し、深遠なる$E=mc^2$の式を完成したように。このほんの疑問の解決を収穫とするために、この芦高生活三年間の収穫を如何に役立ち得るか…。

はんと涙がみたくさえなるのです。協力一致の下に明確な目標に向って全校生に大きな意義を持って来る記念祭で、芦高生活を代表する感激の収穫でありましょう。しかしこの小さな学校という社会は、もう過ぎ去って行く。三年生は、はや今日卒業だ。芦高の学園生活を去者にして、一人一人が大きく羽ばたかれる時である。

◇本号は特に三年生の卒業を中心に四面を作った。また新聞八十号特集として座談会をやった。

◇我々二年部員もようやく軌道にのり、芦高の御協力によりここに新聞と声笛を発行することができたことを感謝します。

◇紙面の都合により今号は先頭巻頭およびクラブスケッチを休載させていただくことをお詫びします。

ラッパを持つ子
県下絵画展特選　3年　谷口欣弥君

卒業生

三年間の収穫

好きなことをして

—三年I組　阪本　清—

日常繰返したことばかりいているわれわれも、今は大詰の部ともきだ。タップリとある参考書のページ数、少ない時間、このやりくりは家計をあずかる主婦のツッカリとしていた。その時毎週三回すつ、夜にアルバイト（家庭教師）に出ていたから、それが相当よっと注意した時、怒ってしまったえて、ラクビーの方は途中で

日常繰返したことばかりいているわれわれも、今は大詰の部ともきだ。タップリとある参考書のページ数、少ない時間、このやりくりは家計をあずかる主婦のツッカリとしていた。その時毎週三回すつ、夜にアルバイト（家庭教師）に出ていたから、それが相当よっと注意した時、怒ってしまったえて、ラクビーの方は途中で

止めてしまった。その後、アルバイトは一週に五回、そして、好きなお勉でもやろうかと思って、土曜思った。とにかく断れた時はが、今までは、それらの感情を表わなければならないことを感じ必ず誰か自分の友達にそれを打ち明けるようにしている。自分でくよくよするのは一番馬鹿らしいことだと思う。そういう点で高校時代友達を作るということは絶対必要だと思う。染いその点において僕は案外感謝しているのも、僕の高校生活を楽しくしてくれた原因であると思う。

最後に、高校時代の収穫は何かと周りても、僕は今、適当な答えを持たない。恐らく僕が将来において、「青春の息吹よ、もう一度」と思う頃にわかるだろう。高校時代における人生き方など、その時わからないと思う。全ての者が平凡に、全ての者が非凡に生きていると思う。とにかく手足を伸ばし、若さを思い存分発散することだと思う。

へのいい知れぬ不安などを感じ、笹きたい思いをしたことがあり、

止めてしまった。その後、アルバイトは一週に五回、そして、好きなお勉でもやろうかと思って、土曜思った。とにかく断れた時はが、今までは、それらの感情を表わなければならないことを感じ必ず誰か自分の友達にそれを打ち明けるようにしている。自分でくよくよするのは一番馬鹿らしいことだと思う。そういう点で高校時代友達を作るということは絶対必要だと思う。染いその点において僕は案外感謝しているのも、僕の高校生活を楽しくしてくれた原因であると思う。

最後に、高校時代の収穫は何かと周りても、僕は今、適当な答えを持たない。恐らく僕が将来において、「青春の息吹よ、もう一度」と思う頃にわかるだろう。高校時代における人生き方など、その時わからないと思う。全ての者が平凡に、全ての者が非凡に生きていると思う。とにかく手足を伸ばし、若さを思い存分発散することだと思う。

編集後記

◇三学期に何事かに熱中しようとしたら、もう過ぎ去って行く。三年生は、はや今日卒業だ。芦高の学園生活を去者にして、一人一人が大きく羽ばたかれる時である。

◇本号は特に三年生の卒業を中心に四面を作った。また新聞八十号特集として座談会をやった。

◇我々二年部員もようやく軌道にのり、芦高の御協力によりここに新聞と声笛を発行することができたことを感謝します。

◇紙面の都合により今号は先頭巻頭およびクラブスケッチを休載させていただくことをお詫びします。